

南風 こまち

「水島くん、例の件はどう？」

「どうもこうもありませんよ、明智先輩。あの会社ろくに返事もよこさない。もう切りましょうよ、あんなところと仲良くしても足を引つ張るだけです」

「あの会社、私が初めて担当したんだけど地雷だったみたいね。当時の担当者の白馬って人も仕事ができないくせに女癖が悪くて」

「嫌ですね、そんなセクハラおやじの相手なんて」

「まあ殺されちゃったから、終わった話よ」

「殺されたって、社会的にですか？」

「いや、会社の部下に物理的にだって」

「……さーて、帰るとしましょうか」

「でも、この雪よ？ 電車で動いているかしら」

「げっ、そうだった。……あっちゃー、参りましたね先輩。京王止まっていますよ」

「JRも駄目？」

「ええと……駄目です、止まっていますね。まあこの雪じや仕方ないでしょうね」

「困ったわね、私は最悪歩いて帰れるけど、水島くんは家遠いんですよ？」

「そうなんですよねえ、困っちゃいますよ。わはは」

「呑気なものね」

「ジタバタしないのがモットーです」

「少しは焦りなさいよ。さつきから表通りを見ても車一台通ってないわよ」

「……え？」

「え、じゃないでしょ。このぶんだとタクシーは厳しそうですね」

「じゃ、じゃあホテルを」

「この辺、宿もあまりないわよ」

「……え？」

「え、じゃないでしょ」

「マジっすか、ちよっと調べてみますね……わっ、カプセルホテルしかない！ しかも満室って」

「え、この辺そんなものあるの」

「みたいですね。ほら、ここ」

「へえ、本当ね」

「弱ったな。そうだ先輩、雪が止むまで雨宿り、いや雪宿りさせてくださいよ」

「ええ？」

「そんな渋い顔しないでくださいよ、ほら、かわいい後輩の顔に免じて」

「あなたの顔は何一つかわいくないわよ」

「う、うるさいですね！ これでもトトロみたいって言われるんですよ！」

「トトロみたいなのはあなたの腹でしょうが！ ……でも仕方ないわね、家にあるもので何か食べさせてあげるわ」

「さっすが明智先輩、太っ腹！」

「でもあなたに食わせると財布と冷蔵庫が死ぬのよね。少しはセーブしなさい」

「そうと決まれば早く行きましょう、ほら先輩！」

「最後まで聞きなさいよ」

「おじゃまします」

「あまりきれいじゃないけど、まあゆっくりしていきなさい。トイレと洗面所はそこね、先に手洗ってきて」

「はい」

「さーて、冷蔵庫には何があったかしら……肉団子とニラ、白菜、卵、あとは……」

「ぎゃーっ！」

「え。何！？ 水島くん、どうしたの！」

「っ、冷たい！ 何ですかこの水！」

「あ、ごめん。お湯の電源切ってたわ」

「頼みますよ先輩、おっちょこちよいなんだから。あはは」

「あんたに言われたくないわよ！ この忙しい年末に何度書類を直したと思って」

「あ、先輩。夕食どうします？」

「だから最後まで人の話を聞きなさいよ……しようがないわね、冷蔵庫の中身で鍋でも作りましょう」

「え、先輩、鍋作れるんですか？」

「私を何だと思っているのよ、あなただっけ作れるですよ」

「無理ですよ。というか、先輩のことをろくろを冷蔵庫で冷やす変人だと思わけないじゃないですか」

「その鍋作りじゃないわよ！ ろくろ回したって焼き場が無いでしょ！」

「え、明智先輩の家にはでかい釜があつて日本中に素焼きの鍋釜を出荷しているって聞いたんですけど」

「どこから漏れたのかしら、極秘なのに……っってちがう！」

「あはは、ソースは秘密ですよ。それより、食材は何があるんですか？」

「これ。肉団子に卵、ニラ、白菜、大根、ブナシメジもあるわね。それに長井さんのべにばな葉。あとキムチにコチュジャン」

「チゲ鍋ができますね。暖まりますよ、これは。でもなんでニラが？」

「餃子を作ろうと思って。でも、皮を買い忘れていたの

よね」

「じゃあ今度餃子やりましょうよ。先輩、ガスコンロありますか？」

「無いわね。水島くん、鍋作れる？」

「任せてください、僕は冬には水島から鍋島に名前を変えらるくらいですからね」

「ふふ、じゃあ任せるわね。私、ちよっと下のコンビニに行つてくるから」

「え、なんでまた」

「酒がないでしょ。鍋は下の戸棚よ」

「あ、そっか。でも僕行つてきますよ？ 鍋これですか？」

「バカね、この雪でさっき何度も転びかけたじゃないの。私は冬用のブーツ持つてるし」

「じゃあ僕がそれ履いていきますよ」

「あなたには無理よ、女物だし。女物ブーツを履いた水島くん、ちよっと見てみたいけど。あ、コンロのスイッチそこね」

「へいへい、了解です。だしパツクなものあります？」

「冷蔵庫横の引き出しに鱈節があるからそれ使つて。お酒は何がいい？」

「ビールお願いします」

「はい。じゃ、適当に作つておいてね。鍋島くん」

「お任せあれ。鍋島の名をナメないでくださいよ」

「ただいま。うーん、お出汁のいい匂い」

「あ、先輩。お帰りなさい。白菜が煮えてこれからニラを入れるところです。あと鶏ガラ借りました」

「へえ、上手いものね。でもキムチは？」

「味変で楽しもうと思つて最初は水炊きにしました」

「あらいいわね、とりあえずお豆腐とこんにゃく、あと

うどんを買ってきたわ」

「え、うどんですか？」

「え？ べに使うでしょ？」

「雑炊にしようかと思つていましたけど」

「冷ご飯が無いのよ」

「が、がびーん」

「反応が昭和ね」

「だって先輩、べがうどんって」

「ん？ なあに？」

「な、なんでもないです……あ、そーだ先輩、お豆腐とこんにゃく切つてもらえませんか？」

「はいはい」

「雪どうでした？」

「強くなるばかりよ。これだと明日朝も電車が止まるかもね」

「参りましたね、着替えも無いのに」

「というか、水島くんがご飯を食べても帰れないかもしれないわね……こたつくらいなら貸すわよ。あなたなら変な事しないでしようし」

「こたつですか、いいですね。僕は冬には水島からこたつ島に改名するくらいですからね」

「何言つてるのよ。あ、煮えてきたわね」

「じゃあ一度食べましょうか。鍋敷きありますか？」

「ええ。ほら」

「じゃあ食器おねがいします」

「ビールいろいろ買ってきたけどどれがいい？」

「何があるんですか……っって、こんなに買ってきたんですか！？」

「へへ、どうせこの雪だと明日の会社は休みでしょ。それにビールは腐らないし」

「いいですね、そういう割り切り好きですよ。じゃあサッポロでいいですか？」

「いい趣味してるわね。じゃあ水島くん、鍋運んでくれる？ 手袋はそこ」

「一人暮らしなのに土鍋があるのは強いですよ、羨ましいです」

「実家から出てくるときに持ってきたのよ。美味しそうに煮えているじゃない、でもこの白いのなに？」

「この薄っぺらいのですか？ ダイコンですよ」

「え、こんなに薄いのに!？」

「はりはりした食感が美味しいんですよ」

「水炊きくんって意外と器用なのね」

「おや、鍋島くんから進化しましたね。お褒めにあずかり光栄です」

「はいはい。じゃあ食べましょうか。はい、グラス出して」

「ああ、こりやどうも。先輩も」

「はいはい。おととと」

「じゃあ、かんぱーい!」

「乾杯」

「んぐっ……ぶっはあ! この一杯のために生きていくる!」

「ふう、仕事上がりの一杯は最高ね。鍋もできたし、食べましょう。ほら、お皿ちょうだい」

「大盛りでお願いしますよ」

「分かってるわよ。こんなもん？」

「うーん、もう一声!」

「じゃあ出血大サーブス。どうよ!」

「わーっ、明智先輩最高っす!」

「湯気も立ってて美味しそうね」

「先輩、そんなもんでいいんですか？」

「だってこの後にチゲ鍋作るんでしょ？」

「あっ、そうでした」

「だからあなたはおっちょこちよいなのよ。いただきます」

「いただきますーす!」

「ふむっ、はっ、はふっ、あつふ」

「ふえんぱい、やふえどしないふえくだふあいよ」

「あなたと一緒にしないでよ。はふっ、でもおいひい」

「ふえっしょー? 鍋島の名をナメないでくださいよ」

「こんなに美味しいなら忘年会なんてやらずに、水島くんと二人で打ち上げをするのもいいかもね」

「ほりやいいでふね。へも、もう幹事が動き出しているんじゃないですか？」

「伊勢さんだっけ、最近転職してきた温泉好きの人」

「何が何でも定時に上がる鉄の女。あの人、前の職場で飲み会の幹事を任せられたけど、コロナを理由に独断で中止して職場の同僚や後輩から喝采を浴びたって噂があるけど……あら、大根美味しいわね」

「ふありふありしふえるふえしよ?」

「はい?」

「はりはりしていて美味しいでしょ? 人参でやっても美味しいんですよ、出汁をよく吸うので。大根もですけど、ニラも美味しいですね」

「飲料事業部の松浦さんが教えてくれた高知のニラよ。たまたま近所のスーパーで売ってたの」

「松浦さんですか。そういうえば夏に高知に出張していましたね。インスタに牛玉ぶっかけうどんが上がっていて、それを見て僕もうどんを食べに行きましたよ」

「あなた、すぐ影響されるわよね」

「でもおかげで会社近くの美味しそうな店はほぼ網羅できましたでしょ?」

「まあそれは否定しないけど。でも、前に行った(つばきグリル)は伊勢さんの受け売りじゃないの? 前の会社に勤めていた時によく通ってたって」

「ハンブルグステーキ、また食べたいですよねえ」

「新宿にあったからよかったけど、伊勢さんが行っていた品川はちよつと遠いのよね。さて、そろそろチゲにしましょうか」

「いいですね。じゃあまた鍋をあつためますね」

「水島くん、立ったついでに新しいビール持ってきて」

「えー、先輩行ってくださいよ。というか僕は客人なのになんで料理しているんですか!」

「やかましいわよ鍋島くん、大人しく鍋奉行してなさいよ!」

「先輩そんなキャラでした? 新幹線ではいつも酒入るとすぐ寝るじゃないですか」

「仕方ないじゃないの、あれ揺れがちようどよくてすぐ眠くなるんだから。本来はこんな」

「はいはい、チゲ鍋しましょうね!」

「ちよつと、話聞きなさいよ!」

「キムチのいい匂いね」

「最初に饅節で出汁を取りましたからね。味に深みも出ているはずですよ」

「水島くん、次のビールどうする?」

「プレモルにしましょうか」

「いいわね」

「ささ、できましたよ」

「ぴりっとしていい香りね」

「じゃあ先輩、グラス」

「あら、悪いわね。ほら、水島くんも」

「へへ、こりやどうも」

「悪い顔しているわよ」

「元からですよ」

「越後屋、お主も悪よのう」

「へっへっ、お代官様ほどでは」

「は？」

「あ？」

「……」

「……なんでけんか腰になるんですか」

「まあまあ、チゲ鍋食べましょう。ぐつぐつ煮立っているし」

「ですね。いったただつきまーす！」

「いただきますしゅ」

「明智先輩、噛みました？」

「何か言った？」

「な、なんでもないです……」

「よろしい」

「はふはふ、ずずずずずず……うーん、爽やかな辛味

へももうふこし辛くてもいいでふね」

「ひらはねひほかほひいはね」

「はい？」

「白髪ねぎとか欲しいわね」

「確かに、メもうどんよりも雑炊よりもラーメンって感

じかもしれませんね」

「あ、まだ肉団子残ってた。チゲ島くん、いる？」

「いいんですか？ いただきます」

「はい。あら、このくったり煮込まれたのはもしかして」

「ほら、べにはな葉ですよ」

「山形の長井さんが送ってくれたものね、今はシーズンじゃないはずだけど。冷凍のものを送ってくれたのよ」

「チゲ鍋に入れても上品な味わいですね、もつと評判になってもいいのに」

「何弱気な事言っているのよ、水島くんらしくないじゃない。来年にどんどん売り込めばいいのよ」

「……そうですね！ 来年も頑張ります。あ、そうだ先輩、売り込みと言えはこの間変なセールスが来たんですよ」

「変なセールス？」

「ええ。小説執筆支援会の大巻とか言っていましたけど」

「ふうん、変な団体もあるものね。で、どうしたの？」

「追い返しましたよ。僕は小説なんて書きませんし」

「たまにいるわよ、そういうよく分からないセールス。

……ちよつとトイレ行ってくるわね」

「ついでに胡椒がラー油を持ってきてくれますか？ コ

チュジャンもキムチも使い切ってしまったって」

「え、コチュジャン使い切ったの？ あんなにあつたのに」

「あまり中身残っていませんでしたよ、あれ」

「おかしいわね、買っておいと思ったのだけけど」

「買い忘れですか？ ボケ智先輩らしくないですね」

「誰がボケ智よ！」

「はいはいおばあちゃん、ご飯は二日前に食べたでしょ」

「ふっ、ちよつと待ちなさいよ、あんたそれシャレにな

らないわよ」

「あら、もうメにしたの？」

「ええ。茹でるのに時間かかるでしょうし。ラー油を足

して、溶き卵を入れてみました」

「いいじゃない。あ、でも水島くん、ワイシャツに飛び散らないように気を付けてね」

「大丈夫ですよ。僕は白装束で大盛りカレーうどんをきれいに完食するかくし芸を持っているんですよ」

「本当？ それは見てみたいわね」

「まあそのうち。今日は代わりにチゲうどんでご覧に入

れましょう」

「じゃあ食べましょうかね。ふー、ずるずるずる」

「ぞぞぞぞぞぞ……ごほっ！」

「ふあっ、先輩！ ばっちいですよ！」

「ごめんごめん、熱くて。あつ、辛いけど美味しい、こ

れはビールが進むわね……どうしたの、水島くん？」

「僕のワイシャツが……」

「あつ、ごめんね。クリーニング代出すから」

「いやいや、いいですよ。ちよつとお腹周りがきつくな

って、新しいのを買おうと思っていたので」

「少しはダイエットしなさいよ」

「えー、やーだーやーだー！ 寝酒するのー！」

「それマジで体に悪いからやめた方がいいわよ」

「え、あ、はい」

「はふはふ、それにしてもうどんはおいひいはね」

「もちもちしてて歯ごたえがあつていいですね、それで

いてつるんとしているのどこしいですし」

「汁がけっこうどろっとしているからなおさら食感が目

立つわね」

「卵、こんなもんでよかったですか？」

「入れすぎると味がぼやけるからこれくらいでいいわよ。

あ、お豆腐残ってた」

「先輩、絹豆腐派なんですか？」

「違う違う、コンビニにそれしか無かったのよ。普段は

崩れにくい木綿豆腐にしているわね」

「確かにグズグズですね、煮込みすぎたかな？」

「だって水炊きからチゲ鍋に味変してさらにうどんを煮込んだんでしょ、仕方ないわよ」

「まあまあ、腹に入れば同じですよ。どうせ腹に入れるなら楽しみたいですけど。これどこのうどんですか？」

「えーとね、レシートには讃岐うどんって書いてあるわね」

「讃岐うどんですか、香川行きたいですねえ」

「年明けに出張で行くわよ。四国四県全部」

「いいですねえ……え、全部？」

「そう。海田社長に言われたわ」

「あの白髪頭、まーためんどくさい仕事を……」

「いいじゃない、また駅弁食べましょうよ。それに、鶴迫さんと梅辻さんも行くって。両手に花でも足りないわね」

「あの二人ですか、本当に仲いいですよ。梅辻さん、最初男か女か分からなかったですけど」

「分かりなさいよ、女物のパンツスーツ着てるでしょ！」

「美味しくご飯を食べられる相手なら男も女も関係ないですよ」

「さらっといいこと言ったような雰囲気しているけど、それ二人の前で絶対言わない方がいいわよ」

「へいへい。……明智先輩、最後に全部食べます？ 汗

浮いていますけど」

「だって辛いじゃないのこれ、もらうわ」

「そうこなくっちゃ」

「ありがと。んぐんぐ……はあ。ごちそうさまでした」

「いえいえ、お粗末様でした」

「いい食べっぷりですね。中トトロになれますよ」

「遠慮しておくわ、トトロはあなた一人でもいいでしょう」

「いいじゃないですか！ 同じ会社にとトロ仲間がなくて寂しいんですよ。海田社長もまあまあトトロですけど、奥さんがけっこうかっちりしているって聞きますね」

「あの人の前で奥さんの話はあまりしない方がいいわよ」

「え、夫婦仲悪いんですか？」

「いやそうじゃないみたいなんだけど……何か、たまにすごく遠い目をするのよ」

「へえ、何かあったんですかね」

「知らないわよ」

「あ、伊勢さんからメール」

「え？ あ、本当だ。忘年会やるんですね」

「この会社が気に入ったのかしらね」

「いいことじゃないですか」

「賑やかになりそうね」

「店はもう決まったんすかね？」

「そうみたいね。へえ、沖縄料理店〈宮古〉ですって。

明大前だった」

「いいっすね、会社から近いですし。あの辺、ラーメン屋が多いんですよ」

「ラーメン屋ね。ラーメン屋と言えば、一畑先輩が秋田の中華そばが一番うまいっていつも言ってるけど、前の秋田出張の時に食べてくれたよかったわね」

「一畑先輩って秋田支社から来た方でしたっけ」

「そうそう。水島くんはあまり話したことないか」

「部署が違つとどうしても……確か今は人事部でしたっけ。この間、中途採用の方を引き連れていましたね」

「潮路・白鷺・有明トリオね。三人とも大学で同じゼミ

だったらしいじゃない」

「あの三人、みんな揃って経理でバリバリ働いているみ

たいですね。この間梅辻さんから噂を聞きましたよ、けっこうなやり手トリオだったって」

「そういえば鶴迫さんがご飯に連れて行ってたわね」

「ああ、あの人も僕らと同じ営業に回ってきたのってつい最近でしたっけ」

「そうそう。だから今度の四国出張はほぼ初仕事ね。し

っかりサポーターしてあげてね」

「分かってますって……あつ、京王動いた」

「え、本当？」

「そうみたいです。無事に帰れそうですね。もうこんな

時間ですし、そろそろお暇しますね」

「ええ、気を付けてね」

「ごちそうさまでした、おやすみなさい」

「はい、また明日ね」

『先輩、京王やっぱりダメでした』

「え？ 仕方ないわね、今夜は飲み明かしましょう」

『え？』

「海田社長からメールが入ったわ。明日は午前休ですって」

『やったー！ 先輩、おやつはいくらまでですか？』

『無限』

『そうこなくっちゃ！ ビール冷やしておいてくださ

い！』

「はいはい、転ばないように気を付けるのよ。あと何か

つまみ買ってきて」

『了解です！』

「……ふふっ、長い夜になりそうね」